



企業編



株式会社
テラフーズ

武蔵町糸原1200番地1
設立 ▶ 平成25年2月 従業員 ▶ 8名

創業者の渡邊勲さんは、大学卒業後に貿易商社経営を経験した後、マ

グロの生鮮空輸事業をしていました。形の小さなマグロが安く買い叩かれるのが勿体ないと思い、付加価値を付けるために加工方法を模索していたところ、遠赤外線のことを知りました。そこから研究を重ねて、遠赤外線の電磁波による焼成加工技術を確立し、マグロジャーキーの製造と商品化に成功しました。そして、本格的な生産工場を探していた時、大分県と銀行から武蔵町の遊休工場を紹介され、東京から移転してきました。本格的に製造を始めたところ、賞味期限切れ等の返品が発生



▲油で揚げてないので味付けが少量ですむ

第一次産業編



農事組合法人
国東さんらいずふあーむ

国東町下治郎丸
平成19年3月から地域の農村環境の保全に取り組む

国東町の下治郎丸地区は、個人農家が作付けし難い農地を農地利用組合が中山間直接支

払制度等を利用し、農村環境の整備に取り組みできました。国の減反政策で休耕田となった農地の活用方法を地域全体で協議していたところ、平成19年度に意欲と能力のある担い手を支援するために始まった品目横断的経営安定対策を利用して、休耕地で麦と大豆を栽培することになりました。加入の対象となる集落営農組織となるため、平成18年9月に下治郎丸営農組合を設立しました。大型トラクターや農業用機械倉庫等を導入し、同年に小麦を7.5ヘクタール作付しました。しかし、営農



▲麦刈り

商工会編



▲左から 従業員の岡部勝博さん、息子の暁さん、松尾泰二さん、妻の律子さん

松尾弘之商店

国東町田深
長年にわたって米穀・麦・大豆の集荷販売業を営む

松尾家は、大正時代より国東町田深で精米業を営んでいました。



▲倉庫の湿度管理

するのが勿体ないと思い、改善方法を探る中で、特許となる「スナック菓子及びその製造方法」を発明しました。それをきっかけに、平成12年「ユニバースフーズ株式会社」を設立しました。大手スナック菓子メーカーが渡邊氏の開発した特許製法に着目し、油であげないポテトチップスの事業化に参加し、原料調達や製造等に大きな支援を受けました。その後、自社ブランド商品「焼きじゃが」の製造販売を始め、平成20年に国内大手飲料メーカーと業務提携し、順調に事業を拡大していきました。しかし、3年後に経営方針の違いから関係が破綻し、倒産しました。その後、競売にかかった工場と製法の特許を知人が落札し、平成25年に後継会社として「株式会社テラフーズ」を設立して運営を任せられた後、会社を譲り受けました。



▲検品作業



▲遠赤外線により焼成する機械

現在では、低カロリーで体に優しい油で揚げないポテトチップスの素晴らしさが、改めて注目され、生産が追い付かない状況が続いており、改善策として工場の増設を計画し、従業員の確保に力を注いでいます。

今後は、武蔵町で生まれ、磨き上げられた独自開発の特許製法を進出が決まっているアメリカをはじめ世界に広めて行く中で、地元の農家の方とも連携を深め、地元の原料を使った商品開発を進めていき、地域に貢献できる会社になるよう努めていきます。



▲箱詰め作業

が密接に連携を取りながら、取り組んでいます。



▲農道整備作業



▲河川整備



▲麦の製粉作業



組合で活動してみると、機械の所有権や農地の利用権の権限が誰にあるのか不明確で、税制面や農機具等の購入資金の調達方法などが、法人の方が有利であることが分かりました。そこで、法人化に向けての協議を始め、地区内に農地を持つ47人が組合員となり、「組合員の協同により農業の経営を行うことにより、組合員の経済的な向上を図る」という目的を立て、平成19年3月に「農事組合法人国東さんらいずふあーむ」を設立しました。設立目的を守るために、現在国が戦略作物に指定している飼料用米や麦、大豆などの作付けや2毛作に積極的に取り組み、経営所得安定等の中の「水田活用の直接支払交付金」と「畑作物直接支払制度」を活用し、昨年度は地元の方たちに総額260万円の労務賃金を支払うことができました。しかし、設立から9年が経ち、役員の半数が交代しましたが、若返りは行われていません。また、作業負担を減らすための機械化と、今後の農業政策に柔軟に対応できる組織作りが必要になっています。今後は、法人名「さんらいず」のように、いつまでも地域の農村環境を照らし続ける太陽のような存在であり続けるために、地域のみなさんと組合員が密接に連携を取りながら、取り組んでいます。



▲草刈り作業



▲麦除草剤散布

平成11年からの米の自由化で、民間業者など競争相手が増加しました。しかし、これまで信頼関係を築いてきた農家は、そのまま出荷を継続してくれました。また、平成14年に民間でもできるようになった農産物検査の資格を取得し、集荷した農産物の等級検査を行うようになりました。泰二さんは、平成25年の全国農産物検査員コンテストで全国2位に入賞するなど検査技術を磨いており、検査の正確性を信頼して出荷してくれる農家が増えてきました。そうした中、4年前から息子の暁さんが、一緒に働くようになり、農産物検査員や農業指導技士等の仕事に必要な資格を習得しています。



▲検査の様子



▲検査用に米を抜き取る様子

泰二さんは、「集荷のためには、検査の技術が大事なので、今後も親子で技術を磨いていきたい。それと、地粉の需要が高いので、より生産量を増やせるように機械の更新などを図りたい」、暁さんは、「うちの店で必要なのは、農家との信頼関係です。農家の皆さんに信頼してもらうためには、技術と知識がさらに必要です。これから、もっと勉強し、農家から信頼される人になりたい」と語っていました。